りは曲尺にて寸より二三寸迄なり、寶永の頃より、名を賞して翫ぶ者ありし、正德の末つかた、高根、小倉山抔といふ菊あり、享保に至る迄、花形に丁子咲、毛咲、管咲の類ひあれども、餘に賞せず、近世菊花盛んなる趣意は、享保十乙巳年五月、紀州和歌山より、紀藩の臣落合氏菊苗を都下へ持來り、此種色々變じて珍花たり、此菊の生は、菊の中の別種なり、莖細く花葉抔も麗、近來の珍華也、此菊上月吉岡の兩氏へ贈り、夫より日向畠山奥津の三氏へ移り、僕○松籟軒南甫この花を奇觀する事四年の間なり、同十四己酉春、此菊を奥津氏より得て、年々種を蒔、今三十四年に至る、其頃は秘華珍品と賞して、實生を仕立おくに、散らすべからずと盟をなし、各相應の花檀を搆へ愛翫す、世人是を知らず、時に澀谷山榮傳僧、此花手に入培養專にして、益色々の實生出たり、此菊を世人賞すといへども、金王菊と名付、其頃は他仁へ苗送らず、因て尊秘計にて此菊を求んと欲て、紀州和歌山を初として、諸國を尋るといへども、此菊花得がたし、かくの如くの珍花なり、然るといへども正菊にあらず、異形の花也、況やヨレクルイ卷込咲を、むかし愛翫する事を聞かず、故に斯なるは造化の變にて、變じたる珍華なるべし、先づ吉野山、飛鳥山、金王櫻、筆捨松、大眞殿、各秘花にて、其頃は世人の得難き菊なり、此外珍花數多出たり、此時より結り咲よれ咲を、世人珍花と稱して、菊花大氣に盛んなり、

〔菊花俗談〕寛延二己巳年九月、市ヶ谷八幡社内にて、或人會主として、一場予、○松籟軒南甫府内の實生、凡二百餘種を取集む、都下にをゐて實生會の始め也、此中に紀州菊の實生は二三ヶ所より出る、此花を賞して、聊の文を綴りたり、是に同士の輩有て、寛延四辛未秋九月、實生會を催し、花の位を定む、紀州菊花形付と題號して、菊譜を綴れり、是より菊譜數品出たり、

〔嬉遊笑覽十二草木〕江戸巣鴨の花戸、年毎に菊を作る、花壇七八間ばかりにして家ごとに作る、中菊にてありしが、文化の初大作りとて、一本の菊にて鳥獸山水種々の物を作り、後には百姓商人まで